2. 夫婦で家事についてどの程度分担しているか	1. もっぱら配偶者	2. ほとんど配偶者	3. 夫婦が同じくらい	4. ほとんど自分	5. もっぱら自分
3. 夫婦で収入についてどの程度分担しているか	1. もっぱら配偶者	2. ほとんど配偶者	3. 夫婦が同じくらい	4. ほとんど自分	5. もっぱら自分

問9. この1週間のあなたの体や心の状態についてお聞きいたします. 以下の質問項目について最も近い回答に○印をつけて下さい.

質問項目	回答欄			
	この一週間のうちで			
1. 普段は何でもないことがわずらわしい	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
2. 食べたくない。食欲がおちた	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
3. 家族や友達からはげましてもらっても気分が晴れない	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
4. 他の人と同じ程度には能力があると思う	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
5. 物事に集中できない	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
6. ゆううつだ	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
7. 何をするのも面倒だ	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
8. これから先のことについて積極的に考えることができる	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
9. 過去のことについてくよくよ考える	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
10. 何か恐ろしい気持ちがする	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
11. なかなか眠れない	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
12. 生活について不満なく過ごせる	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
13. ふだんより口数が少ない。口が重い	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
14. 一人ぼっちでさびしい	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
15. 皆がよそよそしいと思う	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
16. 毎日が楽しい	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
17. 急に泣きだすことがある	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
18. 悲しいと感じる	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
19. 皆が自分をきらっていると感じる	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上
20. 仕事が手につかない	ア. ない	イ. 1-2日	ウ. 3-4日	エ. 5日以上

※以下の問 10・11は現在、フルタイム勤務またはパート勤務の方のみお答えください．それ以外の方は、13ページの問12にお進み下さい．

問10．「1.フルタイム勤務」と「2.パート勤務」の方にお尋ねします．

あなたが今の職場やお仕事について感じていることについてお尋ねします．
お仕事の内容上、質問内容があてはまらない場合は「1.あてはまらない」を、「あてはまる」場合は回答「2.苦痛・不快でない」～「4.かなり苦痛・不快だ」のうち、最もあてはまると思われる回答欄の番号に、ひとつだけ○印をつけて下さい．

質問項目	回答欄			
	あてはまらない	あてはまる		
1. 成果給制が実際の能力評価に反映されない ※成果給制: 自らの活動の成果に応じて給与が支給される制度	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
2. 評価の結果に納得いかないことが多い	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
3. 人物の社会性や人間性は評価されにくい	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
4. ひたすら忙しい仕事だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
5. 客先や仕事相手からの苦情が多い仕事だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
6. とても速くこなすことが必要な仕事だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
7. 予定外の残業が多い仕事だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
8. 時間通り休息や昼食時間がとれない	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
9. 細かい作業や追求が必要な仕事だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
10. 日々新しい技術や知識が必要な仕事だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
11. 仕事中の時間管理が厳しい	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
12. 自分の判断で仕事を進めることができない	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
13. 仕事の内容や方法を自分で決めることができない	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
14. 仕事のスケジュールを自分で決められない	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ
15. すぐ上の人達は、仕事で困った時、技術や実務面で協力してくれない	1. あてはまらない	2. 苦痛・不快でない	3. やや苦痛・不快だ	4. かなり苦痛・不快だ

16. 仕事で困った時、すぐ上の人達は アドバイスや言葉かけがほとんどない	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
17. すぐ上の人達はどちらかといえば有能とは いい難い	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
18. 仕事に困った時、技術や実務で 協力してくれる同僚がいない	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
19. 仕事の愚痴を聴いてくれたり、 言葉かけしてくれるような同僚がいない	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
20. 同僚達はどちらかといえば有能とはいい難い	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
21. 失業の不安がある	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
22. 今の職場でいつまで働けるか不安だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
23. 身分が不安定だ	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
24. 年収が減少していきそうだ	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
25. 有給休暇をとるのに、周囲に気兼ねする	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
26 個人的な都合で早く帰ろうとしても、 帰りにくい雰囲気がある	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ
27. 勤務時間外にも仕事がらみの人間関係に しばられる	1. あてはまらない	2. 苦痛・ 不快でない	3. やや 苦痛・不快だ	4. かなり 苦痛・不快だ

問１１．「1. フルタイム勤務」と「2. パート勤務」の方にお尋ねします.

現在のお仕事について考えた時、以下の項目はどのくらい当てはまりますか.
もっともあてはまると思われる回答欄の番号に、ひとつだけ○印をつけて下さい.

質問項目	回答				
1. 自分が家族と過ごしたい時間を、 思っている以上に仕事にとられる	1.まったく あてはまらない	2.あまり あてはまらない	3.どちらとも いえない	4.ほぼ そのとおり	5.まったく そのとおり
2. 仕事に時間が取られるため、仕事と同様に 家庭での責任や家事をする時間がとりにくい	1.まったく あてはまらない	2.あまり あてはまらない	3.どちらとも いえない	4.ほぼ そのとおり	5.まったく そのとおり
3. 職務を果たすのに多くの時間を使うため、 家族との活動ができないことがある	1.まったく あてはまらない	2.あまり あてはまらない	3.どちらとも いえない	4.ほぼ そのとおり	5.まったく そのとおり
4. 家族としての責任に時間を費やすために、 自分の職務が妨げられることがよくある	1.まったく あてはまらない	2.あまり あてはまらない	3.どちらとも いえない	4.ほぼ そのとおり	5.まったく そのとおり

5. 家族と時間を過ごすために、自分のキャリアアップに役立つ職場での活動に時間をかけられないことがよくある	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
6. 家族としての責任を果たすために多くの時間を使うので、仕事の活動が犠牲になっている	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
7. 仕事から帰った時、くたくたに疲れていて、家族といろいろなことをしたり、家族としての責任が果たせないことがよくある	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
8. 仕事から帰った時、精神的に疲れ切っていて家族のために何もすることが出来ないことがよくある	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
9. 職場でのストレスのために、家に帰っても自分が好きなことさえ出来ないことがある	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
10. 家庭でのストレスのために、職場でも家族のことが頭を離れないことがよくある	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
11. 家庭での責任からくるストレスがよくあるので、仕事に集中するのが難しいことがある	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
12. 家庭生活の緊張と不安のため、往々にして仕事をする能力が低下してしまう	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
13. 仕事の際に使う問題解決行動は、家庭ではむしろ逆効果だろう	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
14. 職場で、有効かつ必要な態度や行動は、家庭ではむしろ逆効果だろう	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
15. 職場では効果的な行動は、よい親や配偶者となるには役に立たない	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
16. 家庭ではうまくいく行動が、職場では効果的でないように思う	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
17. 家庭では有効かつ必要な態度や行動は、職場ではむしろ逆効果だろう	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
18. 家庭で、問題をうまく解決する行動は、職場では有用でないように思う	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
19. 仕事がうまくいくと、家庭でも明るい気持ちで過ごすことができる	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり

20. 職場で身につけた知識や技術は、家庭や育児にも役立つ	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
21. 仕事が早く終わると、ゆとりをもって、家事・育児ができる	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
22. 仕事で養われたものの見方や考え方は家庭でも役立つ	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
23. 家庭生活が充実していると、職場でも明るい気持ちで過ごすことができる	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
24. 家庭で身につけた知識や技術は、仕事においても役立つ	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
25. 家庭での用事が早く終わると、多くの時間を仕事に費やすことができる	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり
26. 家庭において養われたものの見方や考え方は、仕事でも役立つ	1.まったくあてはまらない	2.あまりあてはまらない	3.どちらともいえない	4.ほぼそのとおり	5.まったくそのとおり

問12. 最後に、育児する上で困っていることがございましたら、ご自由にご記入ください。

お忙しい中、ご協力いただき、誠にありがとうございました。
お手数ですが、今一度記入漏れがないかご確認のうえ、
同封の封筒に厳封したのち、保育所内に設置されている回収箱に
ご投函くださいますようお願い申し上げます。

就学前児の母親の育児サポートが育児自己効力感および精神的健康に与える影響

矢嶋裕樹・池谷至乃部・金　貞淑・呉　栽喜・尹　靖水

研究要旨

本研究の目的は、育児する母親を対象に、育児サポートが育児に対する自己効力感および精神的健康に与える影響を明らかにすることである。調査対象はA県A市内の公立保育所を利用している908世帯であり、そのうち有効回答の得られた433名を分析対象とした。育児サポートの育児効力感に与える影響をサポート提供者別「夫」「実親」「義理の親」「友人・知人」「専門家」および種類別「情緒的サポート」「手段的サポート」に検討した結果、育児自己効力感と有意な関連を示した育児サポート変数は、「夫の育児サポート」「実親の育児サポート」「友人の育児サポート」であった。すなわち、夫、実親、友人から育児サポートが強く期待できる母親ほど、育児自己効力感が高いという結果であった。抑うつ傾向を従属変数とした重回帰分析の結果、抑うつ傾向に対して有意な影響を示した変数は「夫の育児サポート」「義親の育児サポート」「育児自己効力感」であった。夫や義親からの育児サポートを期待できる母親ほど、育児自己効力感が高い母親ほど、精神的健康が良好であることが示唆された。以上の結果を踏まえるなら、夫、実親、友人からの育児サポートは育児自己効力感を介して、間接的に抑うつ傾向に影響を与えると考えられる。このことから、身近なサポート提供者、とりわけ育児効力感と精神的健康の両方に関連がみられた夫の育児参加を促すことが、母親の育児自己効力感と精神的健康の維持・増進していくうえで重要であることが示唆された。

1. 研究目的

近年、都市化や核家族化による育児の密室化や孤立化、少子化による育児の非日常化やそれに伴う育児経験の不足等を背景に、育児をしていく上で強い困難や不安を感じている母親は少なくない[1)]。母親の育児ストレスを軽減し、精神的健康の維持・改善を図っていくことは、母親の生活の質の向上や円滑な家族関係の維持、子どもの健やかな発達を保障していくうえで重要である。

こうした背景のもと、近年、母親の精神的健康に関連する要因として、母親の認知的要因、とりわけ自己効力感に着目した研究が散見されるようになってきた。社会的学習理論において、自己効力感（self-efficacy）は「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」[2)]と定義され、直面する課題に対して積極的に取り組むことを可能にするなどの機能があると考えられている。より最近では、育児の領域に特定した自己効力感である、育児自己効力感を扱った研究も若干ではあるがおこなわれている[3-7)]。Teti & Gelfand（1991）によれば、育児自己効力感は「親としてどのくらい有能かつ効果的にふるまうことができるかについての親の期待」[4)]、すなわち、育児役割をうまく遂行していけるといった親の能力に対する自信と定義される。育児効力感は育児の領域に特化しているため、自己効力感よりも育児に対する

個人的な満足感や適応、育児に対する達成能力に影響を与え、ひいては子どもの行動や発達に影響を与えると考えられるが、わが国において育児自己効力感に関する実証的な研究はほとんどない。

一方、自己効力感の維持・向上にソーシャル・サポートが有効であるといった知見がいくつかの研究において報告されている。例えば、養育困難な気質をもつ乳幼児の妊産婦を対象としたCutrona &Troutmanの研究（1986）においては、ソーシャル・サポートが母親の養育に対する自己効力感を高め、それによって産後の抑うつが抑制されるといった結果が報告されている[6]。近年、Antonnuchi（2001）はこうした一連の研究成果を整理統合し、自己効力感をソーシャル・サポートと健康のあいだの媒介変数として位置づけた理論的枠組みを提示している[8]。わが国においては、育児する母親を対象とした報告はいまだ見当たらないが、リハビリテーション病棟退院高齢者を対象とした清水らの研究[9]や慢性疾患患者を対象とした金らの研究[10]において、すでにAntonucchiの理論的枠組みを支持する結果が報告されている。この理論的枠組みを踏まえるなら、育児する母親においては、ソーシャル・サポート、とりわけ育児に関連したサポート（育児サポート）が母親の育児効力感の維持・向上に寄与し、それによって健康の悪化が抑制されると考えられる。

育児不安やうつ傾向の強い母親に対する育児支援環境を整備していくにあたって、母親が得ている育児サポートの育児自己効力感および精神的健康に与える影響を明らかにすることは重要であると考えられる。そこで、本研究ではAntonucchiによって提示された枠組みに基づき、育児サポートが育児期の母親の育児自己効力感ならびに精神的健康に与える影響を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 対象と方法

調査は，A県A市内のすべての認可保育所11ヵ所を利用している908世帯の保護者を対象として行った。調査の目的，概要を調査員として選出した保育所長に説明し了解を得たのち，担当保育士を通じて、保護者に本調査研究の趣旨を記載した依頼文と調査票を配布した。なお、同一保育所に複数の子どもが在籍している世帯の保護者には1部の調査票にのみ回答を依頼した。回収にあたっては，個人情報の漏洩を防止するため，各自記入済みの調査票を厳封した上で，保育所内に設置された回収箱に投函するよう依頼した。投函された調査票は後日、回収箱ごと筆者らによって回収された。調査期間は2007年4月中旬から5月初旬までの約2週間とした。結果、602人分の回収票を得た（回収率 66.5%）。このうち、統計解析には、いずれの調査項目にも欠損値のない433名分のデータを使用した。

（倫理面への配慮）

本調査研究の対象者には、調査の際に研究の概要を書面にて十分に説明したうえで、同意を得た。調査は、個人が特定されないように無記名自記式質問紙法により実施し、また、収集された記入済みの調査票は他の人が調査票を見ることができないように所定の場所に厳重管理し、個人のプライバシーの確保に最善の注意を払った。

3. 調査内容

調査内容は，母親の年齢，子どもの数、末子の年齢、世帯構成、職種、就労形態、家事役割育児分担、育児サポート，育児自己効力感，精神的健康で構成した。

1) 家事育児役割分担

家事育児役割分担は，国立社会保障人口問題研究所がおこなった全国家庭動向調査[11]における家庭での夫婦役割分担に関する項目（「夫婦で家事についてどの程度分担していますか」「夫婦で子どもの教育・子育てについてどの程度分担していますか」）で測定した。各質問項目に対する回答は「0 点：もっぱら配偶者」」から「4 点：もっぱら自分」で求め，得点が高いほど，家事育児役割を回答者である母親が担っている割合が大きいことを示している。分析には、これら 2 項目の合計得点を用いた。

2) 育児サポート

育児サポートは、情緒的サポートに関する 2 項目（「育児について悩みや不安があるとき、____は相談にのってくれる」「育児に対して嫌なことや不満があるとき、____は不平や不満を聞いてくれる」）と手段的サポートに関する 2 項目（「仕事や病気で育児ができないときは、____が代わりに家事・育児をしてくれる」「ちょっとした用事があるときは、____が子どもの世話をしてくれる」）の計 4 項目で測定した。なお、これまでのソーシャル・サポート研究によれば、同種のサポートであっても、サポート提供者によって、その効果が異なることが報告されていることから[12]、本研究では育児する母親にとって身近な存在である 6 つのサポート提供者（「夫」「実親」「義親」「友人・近隣の人」「専門家（ベビーシッターなど）」「兄弟姉妹」）をそれぞれ____部分に代入して、回答を求めた。

各質問項目に対する回答はそれぞれ「いない、期待できない」「あまり期待できない」「少し期待できる」「とても期待できる」の 4 段階で求め、順に 0-1-2-3 点を付与した。したがって、得点が高いほど、当該サポーターから育児サポートが得られると強く期待していることを意味している。

3) 育児自己効力感

育児自己効力感の測定には、Dumka ら（1996）が報告している Parenting Self-Agency Measure の 5 項目短縮版[7]を、開発者の許可を得て、日本語訳化し使用した。翻訳にあたっては、まず原文を専門家と相談して日本語訳し、それを英語を母国語とし、かつ、日本語が理解できるバイリンガルにバックトランスレーションしてもらい、原文の意味を損ねないように配慮した。そのようにして得られた日本語版尺度の各項目は次のとおりである（「私は、母親としての自分に自信を感じる」「私は母親として、うまくやっていると思う」「私は、他の親にとっても役に立つような、母親として必要な知識を十分に持っていると思う」「私は、子どもとあいだで起きる問題は、たいてい解決することができると思う」「私は、子どもとの間でうまくいかない事があると、うまくいくまで頑張れると思う」）。

各質問項目に対する回答は「まったくそう思わない」から「常にそう思う」の五段階で求め、得点化にあたっては順に 0-4 点を配した。得点が高いほど育児自己効力感が高い

ことを示している。分析には5項目の合計得点を用いた。

4) 精神的健康（抑うつ傾向）

精神的健康の測定には、Radloff によって開発された抑うつの尺度である日本語版 CES-D を使用した[13]。各質問項目に対する回答は「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「非常にそう思う」の4件法で求め，得点化にあたっては順に0から3点を付与した。したがって，この得点が高いほど，抑うつ傾向が強いことを意味している。なお、CES-D の抑うつをスクリーニングするための Cut-off 値は 15/16 点とされている。

3. 解析方法

まず、母親の職種、就労形態、世帯構成によって、育児サポート得点に差がみられるかどうかを検討した。統計解析には、一元配置分散分析と多重比較を用いた。

次いで、育児サポートと育児自己効力感、精神的健康の関係を相関分析により検討した。相関分析には、Pearson の積率相関係数（非正規分布を示す変数については Spearman の順位相関係数）を使用した。

最後に、1) 各サポート提供者からの育児サポートを独立変数、育児自己効力感を従属変数とする重回帰分析、2) 各サポート提供者からの育児サポートに加え、育児自己効力感を独立変数、精神的健康を従属変数とする重回帰分析をおこなった。これら解析には、母親の年齢、職種、就労状況、子どもの数、末子の年齢を回帰式に一括投入し、その影響を調整した。

以上の解析には SPSS 16.0J for Windows を使用した。

4. 研究結果

1. 分析対象者の特性（表1）

分析の平均年齢は 32.7±4.8 歳であった。世帯構成は、核家族世帯が最も多く 321 人（69.3%）、3 世代家族世帯が 108 人（23.3%）、その他が 34 人（7.3%）であった。子どもの人数は2人が最も多く 225 人（48.6%）、次いで1人が 127 人（27.4%）、3人以上が 111 人（24.0%）であった。末子の年齢は平均 2.5±1.6 歳、うち3歳以下の子どもがいる者は 312 人(67.4%)であった。何らかの形態で就労している者は 433 人(93.5%)であった。

2. 提供者別育児サポート間の関連

表2に提供者別育児サポート間の相関係数を示した。1%水準で有意な相関係数がみられた変数の組み合わせは、「夫の育児サポート」と「義理の親の育児サポート」、「夫の育児サポート」と「専門家からの育児サポート」、「実親の育児サポート」と「義親の育児サポート」、「実親の育児サポート」と「友人の育児サポート」、「実親の育児サポート」と「兄弟姉妹の育児サポート」、「友人の育児サポート」と「専門家の育児サポート」、「友人の育児サポート」と「兄弟姉妹の育児サポート」であった。いずれも相関係数は正の値であったことから、一方のサポート提供者から育児サポートが受け

られると強く認知している母親ほど、他方のサポート提供者からも育児サポートが受けられると強く認知していることが示唆された。育児する母親は単独のサポート提供者というよりはむしろ複数のサポート提供者から育児サポートが受けられると認知する傾向にあることが示唆された。

表1. 対象者の基本的属性等の分布

項目		全体(n = 463) n	(%)	$p^{1)}$
年齢	平均±SD	32.79 ± 4.86		
	20代	115	(24.8)	< 0.001
	30代	309	(66.7)	
	40代	39	(8.4)	
世帯構成	核家族[2)]	321	(69.3)	< 0.001
	3世代家族	108	(23.3)	
	その他	34	(7.3)	
子どもの人数	1人	127	(27.4)	< 0.001
	2人	225	(48.6)	
	3人以上	111	(24.0)	
末子の年齢	平均	2.55 ± 1.66		< 0.001
	3歳以下	312	(67.4)	
	4歳以上	151	(32.6)	
職業有無	あり	433	(93.5)	< 0.001
	なし	30	(6.5)	
家事育児役割分担	平均±SD	10.55 ± 1.76		

1) χ^2検定の結果を示した.
2)本研究では「夫婦と未婚の子のみで構成された世帯」を指す.

表2. サポート提供者別育児サポート間の関連

項目	1	2	3	4	5	6
1. 夫の育児サポート	1.00					
2. 実親の育児サポート	0.03	1.00				
3. 義親の育児サポート	0.289***	0.195***	1.00			
4. 友人の育児サポート	0.098*	0.231***	0.102*	1.00		
5. 専門家の育児サポート	0.139**	0.04	0.093*	0.236***	1.00	
6. 兄弟姉妹の育児サポート	0.05	0.308***	0.07	0.264***	0.114*	1.00

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

3. 提供者別育児サポートと育児自己効力感および精神的健康の関連

育児自己効力感を従属変数とした重回帰分析の結果（表 3)、育児自己効力感と有意な関連を示した育児サポート変数は、「夫の育児サポート」「実親の育児サポート」「友人の育児サポート」であった。すなわち、夫、実親、友人から育児サポートが強く期

待できる母親ほど、育児自己効力感が高いという結果であった。

抑うつ傾向を従属変数とした重回帰分析の結果、抑うつ傾向に対して有意な影響を示した変数は「夫の育児サポート」「義親の育児サポート」「育児自己効力感」であった。夫や義親からの育児サポートを期待できる母親ほど、育児自己効力感が高い母親ほど、精神的健康が良好であることが示唆された。

以上の結果を踏まえるなら、夫、実親、友人からの育児サポートは育児自己効力感を介して、間接的に抑うつ傾向に影響を与えると考えられ、本研究においてもAntonucchi が提示したモデルをおおむね支持する結果が得られた。なお、自由度調整済み決定係数（調整済み R^2）は育児自己効力感を従属変数とした重回帰式で 0.08、抑うつ傾向を従属変数とした重回帰式で 0.16 であった。

表3. 提供者別育児サポートと育児効力感、抑うつ傾向の関連(n=463)

	育児効力感	抑うつ傾向
	Std. β	Std. β
年齢	0.08 n.s.	0.01 n.s.
子どもの数	0.05 n.s.	0.04 n.s.
末子の年齢(0=3歳以下, 1=4歳以上)	-0.10 n.s.	0.05 n.s.
世帯構成（0=核家族世帯、1=単親世帯）	0.08 n.s.	0.01 n.s.
世帯構成（0=核家族世帯、1=三世代世帯）	0.01 n.s.	-0.01 n.s.
家事・育児役割分担	0.15 *	-0.10 n.s.
就労状況(0=有職、1=無職)	0.04 n.s.	0.00 n.s.
夫の育児サポート	0.27 ***	-0.30 ***
実親の育児サポート	0.10 *	0.03 n.s.
義親の育児サポート	0.02 n.s.	-0.10 *
友人の育児サポート	0.11 *	-0.07 n.s.
専門家の育児サポート	0.00 n.s.	-0.01 n.s.
兄弟姉妹の育児サポート	0.01 n.s.	-0.05 n.s.
育児自己効力感	-	-0.21 ***
R	0.32	0.43
R2	0.10	0.18
調整済みR2	0.08	0.16

1)世帯構成について「その他」と回答した4名のケースは分析から除外した.

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

5. 考察

本研究は保育所を利用する母親を対象に、Antonucci によって提示された枠組みに基づき、育児サポートが育児期の母親の育児自己効力感ならびに精神的健康に与える影響を明らかにすることを目的とした。

育児自己効力感を従属変数とする重回帰分析の結果、夫、実親、友人から育児サポートが受けられると強く認知している母親ほど、育児自己効力感が高いことが示された。個人のライフコース全般にわたる人間関係を示すコンボイ [14] において、親族や友人は個人と緊密な関係にあることから、個人を中心とする同心円状の最も内側に位置づ

けられている。このことは家族や親族、友人が生涯にわたってさまざまなサポートを提供し続ける存在であることを意味している。本研究の結果、育児自己効力感に関連を示していた変数は、やはり夫や実親、友人といった、母親にとって最も近しい存在からの育児サポートであった。コンボイ同様、「育児に対して嫌なことや不満があるとき、不平や不満を聞いてくれる」「ちょっとした用事があるとき、子どもの世話を頼めたりすることができる」存在は、長期にわたって母親との信頼関係を築いてきた夫や実親、親友であったことは、期待されたとおりの結果であった。

最近の報告によれば[15]、夫に対し「もっと育児に参加して欲しい」と思っている母親の数は決して少なくないとされる。また、従来の研究において、父親に対して情緒的サポートを求める母親が多いことも報告されている[16, 17]。つまり母親にとって夫は、一緒に育児をしてくれる存在であると同時に、育児をしている自分を認め、支えてくれる最も身近な母親のサポーターである。したがって。その夫が育児に関する悩みを聞いてくれたり、相談に乗ってくれたりすることで、母親の育児に対する不安が和らぎ、結果的に母親の育児に対する自信の向上につながったと考えられる。

実親は夫や友人と同程度に、育児サポートが期待されている存在であり、実際に他のどのサポート提供者よりも多くのサポートを実際に提供しているとされている。本研究において、実親の育児サポートは育児自己効力感の改善に有意な関連を示していたものの、その関連の強さは期待されたほど大きいものではなかった。その理由として次のことが考えられる。高齢者を対象とした研究では、サポート提供が過剰になると、サポートを受け取る側の依存度が増し、自尊感情や自己効力感が低下することが指摘されている[17]。本研究において、実親の育児サポートは他のサポート提供者よりも育児サポートが最も期待できる存在であり（付表 1)、また実際に多くの育児サポートを提供していると考えられる。しかしながら、こうした過剰なサポート提供は、実親への過度な依存につながることから、育児自己効力感や精神的健康にネガティブな影響を与える可能性も否定できない。推測の域を得ないが、そのことにより、実親の育児サポートのポジティブな影響が相殺され、実親からの育児サポートが期待されたよりも小さくなったと考えられる。

友人、とりわけ同じ育児をする立場にある友人は、育児についての有益な情報の提供者として、また育児上の悩みや不安を打ち明けることのできる良き相談相手としての役割が期待されている[18]。育児をしていくなかで経験した苦労や大変さを共有しながら、お互いに共感・理解し、成長していくことで、育児効力感の向上がもたらされると考えられる。

精神的健康を従属変数とする重回帰分析の結果、夫や義親からの育児サポートを期待できる母親ほど、育児自己効力感が高い母親ほど、抑うつ傾向が低いことが示唆された。夫からの育児サポートは、育児自己効力感を高めるだけでなく、精神的健康の維持・改善に有効であることが示唆されたことは特筆すべき点である。今後、父親の育児参加が促進されるなら、その成果は母親の育児効力感のみならず、精神的健康にも好ましい影響をもたらすと考えられる。

義親は、従来の研究において情緒的なサポートよりも手段的なサポートを期待されているサポート提供者とされている[19, 20]。核家族の増加により、義親と同居している母親

が少ないことに加え、母親にとって夫や実親ほど親密な存在とはなりにくいために、義親への育児サポート期待は低いと考えられる。しかし若干ではあるが、義親の育児サポートが精神的健康を改善する点については注目に値する結果である。

本研究の結果、本来その効果が期待されている専門家のサポートについては、育児自己効力感や精神的健康と有意な関連がみられなかった。しかしながら、この結果をもって、専門家による育児サポートが育児効力感の向上や精神的健康の改善に有効でないと結論づけるのは性急であろう。今後は「専門家」を具体的に特定した設問文を調査に使用したり、対象地域を拡大し、他地域においても本研究と同様の調査を実施するなどして、精神的健康に対する専門家の育児サポートについて詳細に検討していく必要があろう。

最後に、本研究の結果、夫，友人，義親のサポートが育児自己効力感を高めることが示唆されたわけであるが、このことは必ずしも特定の提供者からの育児サポートでなければ、育児自己効力感の改善は見込めないことを意味するわけではない。サポートネットワークの階層的補完モデル[21]によれば、そもそもサポートを求める相手がいなかったり、そのサポート提供者がサポート提供できなかったりする場合には、代わりに他のサポーターからのサポートがその機能を補完すると考えられている。したがって、いずれの提供者であっても、潜在的には育児自己効力感の維持・向上に有効な育児サポートの提供者となりうる可能性がある。いずれのサポート提供者が母親にとって有益なサポート提供者となりうるかは、母親が置かれている状況に依存すると考えられ、実際、我々のデータにおいても、母親の世帯構成や就労状況によって、育児サポート得点に有意な差を確認している（付表 1，付表 2)。本研究では、対象者全体における育児サポートの育児自己効力感および精神的健康に与える平均的な効果の検討に主眼を置いているため、これ以上の詳細な検討をおこなっていないが、今後、母親がもつ育児サポートネットワークとそれを通じて提供されるサポートの効果についてさらなる理解を深めるために、例えば、世帯構成や就労状況など、母親が置かれているさまざまな状況を考慮に入れた詳細な検討が必要であろう。

文　献

1) 渡辺弥生，石井睦子（2005）母親の育児不安に影響を及ぼす要因について．法政大学文学部紀要，51，35-45.

2) Bandura A. (1977). Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84. 191-215.

3) Coleman PK., & Karraker KH. Self-efficacy and Parenting Quality: Findings and Future Application. Developmental Review, 18, 47-85, 1997.

4) Teti DM, and Gelfand DM (1991) Behavioral Competence among Mothers of Infants in the First Year:The Mediational Role of Maternal Self-Efficacy.Child Development, 62, 918-929.

5) 田坂一子．育児自己効力感（parenting self-efficacy）尺度の作成．甲南女子大学大学院論集．人間科学研究編 創刊号，1-10,2003.

6) Cutrona CE, Troutman BR. (1986) . Social support, infant temperament, and

parenting self-efficacy: a mediational model of postpartum depression. Child Dev. 57. 1507-1518.

7) Dumka LE, Stoerzinger HD, Jackson KM, and Roos MW. (1996) Examination of the cross-cultural and cross-language equivalence of the parenting self-agency measure. Family Relations, 45, 216-222.

8) Antonucci TC (2001) . An Examination of Social Networks, Social Support, and Sense of Control. Handbook of the Psychology of Aging, 427-453.

9) 清水由美子，杉澤秀博（2005）リハビリテーション病棟を退院した高齢者の自己効力感に対するソーシャルサポートの影響．日本在宅ケア学会誌，9（2），47-55.

10) 金 外淑，嶋田 洋徳，坂野 雄二．（1998）．慢性疾患患者におけるソーシャルサポートとセルフ・エフィカシーの心理的ストレス軽減効果．心身医学．38，317-323.

11) 国立社会保障・人口問題研究所（2006）．第3回全国家庭動向調査 結果の概要.
http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ3/NSFJ3_abst.asp

12) 田中 宏二，難波 茂美（1997）育児ストレスにおけるソーシャル・サポート研究の概観．岡山大学教育学部研究集録，104. 177-185.

13) Radloff LS (1997) The CES-D Scale :A Self-Report Depression Scale for Research in the General Population. Applied psychological measurement, 1, 385-401.

14) Kahn RL, Antonucci TC (1980) Convoys over the life course; Attachment, roles and social support. In Baltes PB, Brim OG (ed) , Life-span developmental behavior, 253-286, Academic Press, NY.

15) 国立社会保障・人口問題研究所．第3回全国家庭動向調査 調査結果の概要について.
http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ3/NSFJ3_top.asp

16) 吉永茂美（2007）母親が期待するソーシャル・サポートの実態と育児ストレッサー，ストレス反応との関係－1～6歳児をもつ母親を対象に－．小児保健研究，66（5），675-681.

17) 福島道子，古田真司，畑山伊佐枝（1991）母親の育児に対する社会的支援－都市的地域と農村的地域の比較から－．小児保健研究，50（5），602-606.

18) 樋口広美，坪川ヒモ子，高橋裕子，他：育児実態調査から見た子ども虐待のハイリスク要因-子ども虐待を早期発見・予防のために．保健師ジャーナル．60（10）:1006-1013. 2004.

19) 吉永茂美（2007）母親が期待するソーシャル・サポートの実態と育児ストレッサー，ストレス反応との関係－1～6歳児をもつ母親を対象に－．小児保健研究，66，675-681.

20) 福島道子，古田真司，畑山伊佐枝（1991）母親の育児に対する社会的支援－都市的地域と農村的地域の比較から－．小児保健研究，50（5），602-606.

21) Cantor M, and Little V Aging and social care. In Binstock, RH and Shanas.

E, (eds.) : Handbook of Aging and the Social Sciences (2nd Ed.) , N. Y. : Van Nostrand-Reinhold, 1990.

付表1. 世帯構成別にみた育児サポート得点の平均値

項目	夫のサポート	実親のサポート	義親のサポート
核家族[1)]	8.28 ±3.01	8.60 ±3.27	5.93 ±3.93
3世帯家族	7.92 ±3.14	8.68 ±3.17	7.19 ±3.67
その他	3.29 ±4.59	9.06 ±3.90	1.18 ±2.53

夫のサポート: 核家族 vs その他 ***; 3世帯家族 vs その他 ***
義親のサポート: 核家族 vs 3世帯家族 ***; 核家族 vs その他 ***; 3世帯家族 vs その他 ***

項目	友人のサポート	専門家のサポート	兄弟姉妹のサポート
核家族[1)]	5.50 ±2.77	2.00 ±2.94	4.99 ±3.97
3世帯家族	5.44 ±2.71	2.23 ±3.18	5.31 ±3.84
その他	6.12 ±2.20	2.47 ±2.96	7.71 ±4.10

兄弟姉妹のサポート: 核家族 vs その他 **; 3世帯家族 vs その他 **

*p<.05, **p<.01, ***p<.001
1) 夫婦と未婚の子のみの世帯を指す.
2) Kruskal-Wallis検定およびMann-WhitneyのU検定の結果を示した.

付表2. 母親の勤務形態別にみた育児サポート得点の平均値

勤務形態	夫の育児サポート		実親の育児サポート		義親の育児サポート	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
フルタイム勤務	8.20	3.52	8.81	3.29	6.24	4.01
パート勤務	7.28	3.59	8.41	3.30	5.51	4.23
無職(専業主婦)	8.04	3.00	8.22	3.70	5.68	3.79

夫の育児サポート: フルタイム勤務 vs パート勤務 **
義親の育児サポート: フルタイム勤務 vs パート勤務 *

勤務形態	友人の育児サポート		専門家の育児サポート		兄弟姉妹の育児サポート	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
フルタイム勤務	5.41	2.90	1.97	3.02	5.11	3.86
パート勤務	5.79	2.66	2.07	3.12	5.46	4.08
無職(専業主婦)	5.00	2.88	2.11	2.81	5.32	3.57

*p<.05, **p<.01
2) Kruskal-Wallis検定およびMann-WhitneyのU検定の結果を示した.

働く母親の職場・職務特性が仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーと精神的健康に与える影響

矢嶋裕樹・村上祐子・近藤理恵・呉　栽喜・尹　靖水

研究要旨

本研究は、就学前の子どもを育てながら働く母親を対象に、仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー（negative spillover：NSP）を引き起こす職場・職務特性を明らかにすること、また、それらの精神的健康に対する影響度を明らかにすることを目的とした。A県A市内の公立保育所11ヵ所を利用する908世帯を対象に、無記自記式の質問紙調査を実施した。調査票は各保育所の担当保育士を通じて、保護者に配布され、後日、保育所内に設置された回収箱を用いて回収された。本研究ではひとり親世帯を除き、調査項目に欠損値のない、就労している母親369名を分析対象とした。職場・職務特性は既存の研究を参考に、6つの側面（「評価制度の未熟性」「身分の不安」「失業の不安がある」「非寛容的な職場風土」「過重な仕事の量的・質的要求」「裁量性の低さ」「職場サポートの質の低さ」）から多面的に評価した。母親の就労形態（フルタイム・パートタイム）別に、職場・職務特性の各要素を独立変数、仕事から家庭へのNSP、精神的健康をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行ったところ、次の結果を得た。フルタイムで働く母親において、仕事から家庭へのNSPに有意な影響を与えていた職場・職務特性は「仕事の質・量の要求度」「非寛容的な職場風土」であった。また、職場・職務特性は仕事から家庭へのNSPを介して、精神的健康を低下させる方向に影響していた。一方、パートタイムで働く母親において、仕事から家庭へのNSPに有意な影響を与えていた職場・職務特性は「仕事・質の要求度」「身分の不安」であった。また、職場・職務特性は仕事から家庭へのNSPを介して、精神的健康を低下させる方向に影響していた。以上の結果、仕事から家庭へのNSPは母親の精神的健康を悪化させる可能性が示唆された。働く母親の精神的健康を維持・増進し、ワーク・ライフ・バランスを実現していくうえで、フルタイムで働く母親においては「非寛容的な職場風土」「仕事の量・質の要求度」、パートタイムで働く母親においては「評価制度の未熟性」「身分の不安」「仕事の量・質の要求度」に着目した支援の必要性が示唆された。

1．研究目的

近年、子どものいる世帯に占める妻が雇用者である割合を示す母親の雇用者比率は上昇傾向を示している。特に6歳未満の子をもつ母親の雇用者比率は平成12年の27.2%から平成16年には52.8%まで上昇している[1)]。このように育児期にある母親の社会進出がすすんでいるものの、「男は外、女は内」といった伝統的な性別役割観が根強く存在し[2)]、また地域の子育て支援サービ

スも質・量の観点から必ずしも十分でないことから、仕事役割と家庭役割を担っている母親の数は決して少なくない。仕事役割と家庭役割に従事する母親のように、一個人が複数の役割に従事している状況は多重役割（multiple）と定義される。多重役割に関する初期の研究を概観すると、こうした多重役割状況は、生活満足感や主観的幸福感の向上、良好な家族関係をもたらすといった報告がある一方、多重役割状況は抑うつや心理的健康の低下、気分障害をもたらすといった一見、矛盾した報告もある。

このような多重役割研究にみられる知見の不一致は、役割間の関係性が複雑かつ多様であること、また状況によって異なる関係性をとりうることを反映した結果と考えられる。そのため、近年の働く母親を対象とした多重役割研究によれば、役割間の関係性を示す枠組みとして、分離（segmentation）、補償（compensatory）、スピルオーバー（spillover）が用いられ、心身の健康や生活満足との関連が検討されている[3)]。とりわけ、スピルオーバーの一形態である、役割に伴う否定的な経験や状況が他の役割における経験や状況へと流出することを意味するネガティブ・スピルオーバー（Negative Spillover：NSP）[3)]については、欧米を中心として、すでに生活満足度や心身の健康との関連を検討した数多くの研究の蓄積がある[3-7)]。

わが国においても、子どもを育てながら働く母親を対象に、仕事から家庭への NSP が心理的健康の悪化[8)]、回避的な養育態度[9)]をもたらすことが報告されている[10-13)]。

このように子どもを育てながら働く母親において、仕事から家庭への NSP が母親の心身の健康や生活満足感に与える影響度が次第に明らかになりつつある。しかしながら、仕事から家庭への NSP をもたらす職場・職務特性について詳細な検討をおこなっている研究は少ない。働く母親のワーク・ライフ・バランスの実現に向けた職場環境改善のための示唆を得るうえで、仕事から家庭への NSP をもたらす職場・職務特性を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、心身の健康を維持・増進していくための職場環境を整備する基礎資料を得ることをねらいとして、働く母親の職場・職務特性と仕事から家庭への NSP および精神的健康の関係を明らかにすることを目的とした。なお、労働時間が長くなると、NSP が増加することが指摘されている[14)]。また、パートタイムで働く母親は、フルタイムで働く母親よりも、家事や育児などの家庭にとって都合のよい時間に働きたいといった意識をもっており、仕事の量的・質的負荷が比較的少なく、裁量性の高い職種を選択している可能性がある。そこで、本研究では、働く母親の就労形態（フルタイム、パートタイム）別に上述の検討を行うこととした。

2. 研究方法

1. 調査の対象と方法

(1) 対象と方法

調査は，A県A市内のすべての認可保育所11ヵ所を利用している908世帯の保護者を対象として行った。調査の目的，概要を調査員として選出した保育所長に説明し了解を得たのち，担当保育士を通じて、保護者に配布した。なお、同一保育所に複数の子どもが在籍している世帯の保護者には1部の調査票にのみ回答を依頼した。記入済みの調査票は，個人情報の漏洩を防止するため，各自で封をして，保育所内に設置された回収箱に投函するよう依頼した。投函された調査票は後日、回収箱ごと筆者らによって回収された。調査期間は2007年4月中旬から5月初旬までの約2週間とした。

なお、分析には各調査項目の回答に欠損値が含まれる者、現在就労していない者、一人親世帯の者、をそれぞれ除いた369名のデータを使用した。

(倫理面への配慮)

本調査研究の対象者には、調査の際に研究の概要を書面にて十分に説明したうえで、同意を得た。調査は、個人が特定されないように無記名自記式質問紙法により実施し、また、収集された記入済みの調査票は他の人が調査票を見ることができないように所定の場所に厳重管理し、個人のプライバシーの確保に最善の注意を払った。

3. 調査内容

調査内容は、母親の属性、育児・家事役割分担、職場・職務特性、仕事から家庭へのNSP、精神的健康で構成した。

1) 母親の属性

母親の属性は母親の年齢、世帯構造、就労状況、職種、子どもの人数、末子の性別および年齢、家事育児役割分担を尋ねた。家事育児役割分担は，国立社会保障人口問題研究所がおこなった全国家庭動向調査における家庭での夫婦役割分担に関する項目（「夫婦で家事についてどの程度分担していますか」「夫婦で子どもの教育・子育てについてどの程度分担していますか」）2)で測定した。各質問項目に対する回答は「0点：もっぱら配偶者」」から「4点：もっぱら自分」で求め，得点が高いほど，家事育児役割を回答者である母親が担っている割合が大きいことを示している。分析には、これら2項目の合計得点を用いた。

2) 職場・職務特性

母親の職場・職務特性は、鄭らが作成した労働職場環境特性を測定するPerceived Work and Organizational Characteristics (PWOC) 尺度[15]と、

福丸らが作成した仕事役割の状況に関する尺度[16-18]を引用して作成した。米国国立職業安全保健研究所（NIOSH）の「健康職場モデル」（Healthy Work Organization）では、作業・職場特性とともに、その背後にある「組織特性」を「組織の健康」にとって重要な要因と位置づけている。「組織特性」に着目した研究であるKarasekが提示した仕事の要求度－コントロールモデルでは、要求する仕事の量や質に見合った裁量権が労働者に与えられることで良好な活動が可能になると仮定されている。さらに「努力‐報酬不均衡モデル」では、労働者が仕事について費やす努力とそこから得られる報酬がつりあうよう設定することで精神的健康の悪化が減少すると報告されている[19)-21)]。そこで本研究では、働く母親の職場特性を個人の作業・仕事要因のみならず、組織特性を含めて測定することを目的とし、女性労働者を対象として開発された職業性ストレスの尺度である、PWOCを一部引用した。またPWOCと同様に、女性労働者を対象とした研究で用いられた、職場・職務特性を測定する仕事の役割状況に関する尺度[10, 18)]を採用し、一部引用した。その結果、本研究では「評価制度の未熟性」（「成果給制が実際の能力評価に影響されない」など3項目）「身分の不安」（「失業の不安がある」など 4 項目）「非寛容的な職場風土」（「有給休暇をとるのに、周囲に気兼ねする」など3項目）「過重な仕事の量的・質的要求」（「ひたすら忙しい仕事だ」など8項目）「裁量性の低さ」（「仕事中の時間管理が厳しい」など3項目）「職場サポートの質の低さ」（「すぐ上の人達は、仕事で困った時、技術や実務面で協力してくれない」など6項目」）といった6因子27項目で構成した。各質問項目に対する回答は「0点：あてはまらない」もしくは「1点：あてはまる」で回答を求め、得点が高いほど、職場ストレッサーが多く存在しているということをあらわしている。いずれの尺度も十分な信頼性と妥当性が確認されている。

3）仕事から家庭へのNSP

仕事から家庭へのNSPは、Carlsonらが開発し、信頼性と妥当性が検証されている多次元的ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度（WFC尺度）の日本語版を用いて測定した[22)]。WFC尺度日本語版は渡井らがQOL評価尺度作成の基準に基づいて作成し、十分な信頼性、妥当性が確認されている尺度である。質問は“時間”“ストレイン”“態度”に基づいて構成され、「自分が家族と過ごしたい時間を、思っている以上に仕事にとられる」「仕事から帰った時、くたくたに疲れていて、家族といろいろなことをしたり、家族としての責任が果たせないことがよくある」「仕事の際に使う問題解決行動は、家庭での問題解決には効果的でない」などの計9項目でたずねた。回答は「0点：まったくあてはまらない」から「4点：まったくそのとおり」の5件法で求め、得点が高いほど仕事から家庭へのNSPが起こる頻度が高いことを示している。

4) 精神的健康

精神的健康は抑うつに着目し、その代表的な測定尺度である米国国立精神衛生研究所（NIMH; National Institute of Mental Health）で開発されたCES-D尺度（Center for Epidemiological Studies Depression Scale）で測定した。この尺度は疫学研究用のうつ病自己評価尺度で、高い信頼性、妥当性が報告されている[23]。さらに世界中でさまざまな言語に訳され、思春期の子どもから高齢者まで幅広い年代を対象として使用されている。本研究では島らが訳出し、信頼性および妥当性が確認された日本語版CES-D尺度[24]を使用した。各項目に対する回答は「0点：ない」から「3点：5日以上」の4件法で求めた。各項目得点を単純加算して用い、得点が高いほど抑うつ性が高いことを示している。

4. 分析方法

まず、分析に使用する各尺度得点の平均値および標準偏差を母親の就労形態（フルタイム・パートタイム）別に算出した。平均値の比較にはStudentのt検定とMann-WhitneyのU検定を用いた。

続いて、主な属性と職場・就労特性、仕事から家庭へのNSP、精神的健康のあいだの相関関係をPearsonの積率相関係数とSpearmanの順位相関係数を用いて検討した。

最後に、職場・職務特性と仕事から家庭へのNSP、抑うつ傾向の関連を検討するため、仕事から家庭へのNSPを従属変数とし、職場・職務特性を独立変数とした重回帰分析と、精神的健康を従属変数とし、職場・職務特性と仕事から家庭へのNSPを独立変数とした重回帰分析をおこなった。なお、いずれの解析においても、母親の就労形態別に検討し、母親の年齢、子どもの人数、末子の年齢（0=3歳以下、1=4歳以上）、世帯構成（0＝核家族、1＝3世代家族）、家事・育児役割分担を制御変数として分析に強制一括投入した。

以上の解析には、統計ソフトSPSS16.0J for Windowsを使用した。

（倫理面への配慮）

調査対象者に調査の趣旨を書面にて説明し、得られた資料は研究目的以外には使用しないことを約束した。調査は匿名性保持のため無記名自記式質問紙法を採用し、記入済みの調査票は回収箱にて回収された。回収済みの調査票は個人情報の漏洩防止のため、所定の場所にて厳重管理した。なお、本調査は岡山県立大学倫理委員会の承認を得て行われた。

3. 結果

1. 分析対象者の属性等の分布

表1に分析対象者の基本的属性等の分布を示した。対象者の平均年齢は33.1±4.8歳であった。世帯構成は、核家族世帯が最も多く276人（74.8%）、3世